

國學院大學學術情報リポジトリ

ナシ族トンバ經典『ドゥとスの戦い』について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學 公開日: 2024-03-13 キーワード (Ja): ナシ族, トンバ經典, トンバ教, ナシ語, 宗教説話 キーワード (En): 作成者: 黒澤, 直道, Kurosawa, Naomichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000189

ナシ族トンバ經典 『ドゥとスの戦い』について

黒澤直道

1. はじめに

ナシ族（納西族）は、中国雲南省麗江市を中心に居住する、人口約32万人の少数民族である。麗江市のほか、その北の迪慶チベット族自治州や、雲南省と境を接する四川省やチベット自治区の一部の地域にも少数のナシ族が居住する。麗江市の中心部では、ナシ族の居住地は標高2400mの高原に位置し、恵まれた自然環境の中で独特の文化を育んできた。

本稿に述べる『ドゥとスの戦い』は、ナシ族の宗教「トンバ教」の經典に見られるものであるが、同時に「ナシ族の英雄史詩」として「ナシ族古代文学の三本の支柱」の一つともされている⁽¹⁾。「ドゥ」とは人間の祖先の名称であり、「ス」は自然界の主宰者と解される。この物語には、これまでに公刊された複数のテキストがある。本稿では、これらのテキストを踏まえ、『ドゥとスの戦い』の性質を考察する。

2. ナシ族のトンバ教

ナシ族の独自の宗教は「トンバ教」と呼ばれる。「トンバ」⁽²⁾と呼ばれる祭司が、様々な儀礼や占いを執り行う。儀礼には特徴的な象形文字「トンバ文字」で書かれたトンバ經典が用いられ⁽³⁾、様々な神や悪霊に対する祭祀が行われる。

トンバ教の特徴の一つは、万物に精霊が宿するという、その多神教的な世界観にある。トンバ教には多数の神や悪霊が見られ、名前を挙げれば1500を超えるとされる⁽⁴⁾。そこでは固有の素朴な自然信仰と、チベットやインドから伝わってきた外来の信仰が重層的に折り重なっている。

彼らの素朴な自然信仰から生まれた自然神には、天神、地神、山神、水神、風神、火神、日神、月神などがある。また、男性神と女性神とされる口神とセ神は、創造に関わる神である。ナシ族の生産に関わる神としては、家畜の神、穀物の神、

狩猟の神などがあり、日々の生活に関わる神としては、家の神、かまどの神、村の神、門の神、道祖神などがある。

一方で、おそらくルーツとしてはゾロアスター教まで遡る善神と悪神が「イグオカ」と「イグテユナ」である。また、それに付随する善悪の神々もある。これらはインド、チベットを経由しているものであろう。このうち、イグオカは至尊の神とされている。

トンバ教の開祖である「トンバ・シヤラ」⁽⁵⁾も至尊の神とされている。トンバ・シヤラは、チベットのボン教の導師、シェンラブ・ミボがルーツであるとされてきた⁽⁶⁾。同様に、チベットから伝わった神には、ナシ族の守護神とされる戦神、「サンド」がある。現在、旧暦二月八日のサンド神の祭り（三朶節、もしくは三多節）は、多くのナシ族が参加する民族祝日とされ、現地では公休日にもされているが、そのルーツはチベットにあると言われている⁽⁷⁾。

以上の神々の他には、トンバ教では様々な悪霊、怪物、亡霊、自殺の霊、後継ぎの無い霊、餓えた霊、水の霊などが人間に悪さをするものとして登場し、様々な祭儀の対象となっている。そして、これらの悪霊とも異なり、人間と対等の地位にあるものとして、多くの経典に描かれているのが、次節に述べる「ス」の神である。

3. 自然界の主宰者「ス」

「ス」の神の名称は、ナシ語ではSvq（ス）もしくはShvq（シュ）であるが、この違いはナシ語内部の方言による発音差を反映するものである。本稿では、ナシ語の分布の中心地の発音に従い、「ス」と表記する⁽⁸⁾。漢語では「署」や「述」など書かれるが、これらはいずれもナシ語の発音に対する当て字であり、意味的な関連はない。

スはあらゆる場所に宿る神である。天には九十九のス、地には七十七のス、山には五十五のス、河谷には三十三のス、村には十一のスが宿るといふ。また、それだけでなく、湖のス、崖のス、雲のス、風のス、川のス、泉のス、坂のス、草原のス、石のス、木のス、宅地のスという具合に、あらゆる場所に宿るとも言われる⁽⁹⁾。

スのイメージは、基本としては人間の体と蛇の尾である。その上で、頭が蛙のもの、馬のもの、虎のもの、牛のもの、ヤクのもの、水怪のもの、象のもの、鹿のものも見られる。トンバ経典の文字では、頭部は蛙、体は人間、下半身は蛇のイメージで描かれるが、トンバ教の儀礼に用いられる絵画ではこれに止まらず、さらに様々なイメージが付加されている。

スは自然界の主宰者であり、人間の祖先であるドゥ⁽¹⁰⁾がスの領域を侵したために、スが報復し、ドゥとスの争いが始まった。それを物語るトンバ経典が『ドゥとスの戦い』である⁽¹¹⁾。ちなみに、漢語ではこの物語のタイトルを『白と黒の

戦い』や『白黒戦争』とするものがあり、それはドゥとスのそれぞれ属する領域が、光明の世界と暗黒の世界であるというイメージに基づくものである。ただし、スは必ずしも暗黒の神というわけではなく、自然界の主宰者であることを考慮すれば、このようなイメージを離れて、単純に『ドゥとスの戦い』（漢語では『董術戦争』など）とする方がより適切であると思われる。そこで本稿でも、書名としてはこの表記を採用する。

トンバ經典としての『ドゥとスの戦い』は、主として「トの悪霊を払う」⁽¹²⁾と呼ばれる儀式の中で朗唱される。トの悪霊は病を引き起こすと考えられており、この儀式では病に罹った者の身代わりが置かれ、トの悪霊が払われる。

4. 『ドゥとスの戦い』のテキスト

これまでに公刊された『ドゥとスの戦い』のナシ語のテキストには、以下のものがある。

- (1) 『懂述戦争（卷上）』（和正才・李即善1963）、『懂述戦争（卷下）』（和芳・李即善・周汝誠1964）。
- (2) 『替身道場 董神与術神戦争之経』（和雲彩・和明信1984）。
- (3) 『DDUQ'AIQ SVQ'AIQ《納西東巴經之三》白黒戦争』（和志武1987）。
- (4) 「董術戦争」（和士成・和力民1989）。
- (5) 「禳垛鬼儀式・董術戦争」（和士成・和力民1999-2000）

(1) は、1960年代前半に作成された資料である。中華人民共和国の成立後、麗江県文化館（現・麗江市古城区文化館）において行われた經典の翻訳作業の成果の中の一冊であり、全体としては21種、22冊が作成されている。麗江県文化館では、農村部に居住するトンバを招き、周汝誠をはじめとするナシ族出身学者により、記録と翻訳が行われた。これ以前のトンバ經典の翻訳が、ナシ族以外の学者によるものであったのに対し⁽¹³⁾、麗江県文化館での翻訳事業はナシ族出身学者の手になるものであり、その後の研究の基礎となっている。上巻については、トンバの和正才が読み上げ、それを李即善が記述・翻訳した。下巻については、トンバの和芳が読み、それを李即善と周汝誠が記述・翻訳した。和正才は、麗江北西部の魯甸郷出身の著名なトンバである。この時期に麗江県文化館で記録された經典のうちの幾つかが、和正才の読経によるものである⁽¹⁴⁾。また、下巻を読んだ和芳は、麗江県大研鎮（当時）五台辦事処中和村出身の著名なトンバであり、麗江県文化館で記録された經典の半数を読んだほか、他の研究者にも数百冊の經典を読経・解釈したとされる⁽¹⁵⁾。

(2) は、1980年代初めに成立した雲南省社会科学院東巴文化研究室によって

作成された計24種の翻訳資料の中の一冊である。東巴文化研究室は、中国全土に吹き荒れた文化大革命の混乱が過ぎ去って後、初めて現地に成立した東巴文化専門の研究機関であり、後に研究所、研究院へと昇格していった。この研究室では、農村部出身のトンバを常駐させ、多い時で十人前後のナシ族出身学者が經典の記録・翻訳作業に注力していった。この經典を読んだ和雲彩は、麗江西北部の魯甸郷出身のトンバで、二十代の時期に上述の和正才に学んだ。1978年頃より、その後成立する東巴文化研究室の翻訳作業に協力し、その年月は10年に及んだ⁽¹⁶⁾。

このテキストは、(1)のテキストの上巻の部分にあたり、同じ經典のトンバ文字のテキストに基づいたものである。ただし、(1)とは読経者と翻訳者が異なるため、ナシ語の記音と翻訳の細部では(1)との違いが見られる。

(3)は、ナシ族の言語学者で、トンバ教やトンバ經典について多くの業績を残した和志武によるものである。この書籍にはトンバ文字の原文はなく、ラテンローマ字によるナシ語表記法(納西族文字方案)を用い、『ドゥとスの戦い』のテキストを記述している。この元になる經典を読経したトンバは和年恒(Hoq Nieqheeq)である⁽¹⁷⁾。和年恒は、廬慶チベット族自治州中甸県(当時)三壩ナシ族郷白地行政村水甲湾村の著名なトンバであり、1962～63年の期間、白地村と麗江県文化館で和志武の翻訳作業に協力した⁽¹⁸⁾。これらのテキストの漢語訳は、和志武による『納西東巴經選訳』(和志武編訳1983)、及び『東巴經典選訳』(和志武1994)に収められている。

(4)は、「雲南省少数民族古籍訳叢」として出版された『納西東巴古籍訳注(三)』に収められているものである。この叢書は、同名の第一巻(1986年)と第二巻(1987年)と共に、上述した東巴文化研究室(研究所、研究院)の研究成果を出版したものである。經典を読んだ和土成は、麗江北部の大東郷出身の著名なトンバであり、1983年から1997年まで、トンバ文化研究室での翻訳事業に協力した。この期間、經典の読経のほか、ナシ族の学者へ多くの知識を授けた⁽¹⁹⁾。翻訳者の和力民氏は、同研究室の研究員を一貫して務め、現在においても多くの業績を生み出している著名なナシ族出身学者である。

(5)は、1999年から2000年にかけて出版された『納西東巴古籍訳注全集』に収められているものである。この『全集』は、1980年代以降の二十年近くに及ぶ年月の間に蓄積された東巴文化研究室(研究所、研究院)の成果を集大成したもので、全100巻に及ぶ大著であり、經典の冊数にして合計897冊が含まれている。(5)のテキストは、(4)のテキストと読経者、翻訳者ともに同一であり、基本的には(4)の再録と考えて良いが、部分的に修正が施されている。

以上にあげたテキストの間には、様々な相違が見られる。まず、トンバ文字のレベルでの相違は多数あるが、これは音声言語の一部のみしか記さないというトンバ文字の性質によるところが大きい。また、読音(音声言語)レベルでの相違もしばしば見られ、それぞれの読経者によって、微妙に異なる伝承がなされてい

ることが分かる。さらに、解釈レベルの相違もあり、これはそれぞれの読経者・翻訳者の解釈の違いによるものである。

なお、以上にあげたもの以外にも、「退送是非災禍・董争述闕」（和雲章・和品正1999-2000）、「除穢・董術争戦」（和開祥・李英1999-2000）などのように、『ドゥとスの戦い』という言葉がタイトルに含まれるテキストが存在する。ただしこれらは『ドゥとスの戦い』の部分的なテキストを含むものの、全体としては異なる内容が多くを占めるもので、上記のテキストとは区別しておくのが適切である。本稿では、これらを『ドゥとスの戦い』の周辺テキストと位置付けておく。

一方、『ドゥとスの戦い』の現代漢語訳のみのテキストとしては、以下のものがある。白庚勝1989（日本語文献）及び白庚勝1991（中国語文献）では、その時点で公表されていたこれらの『ドゥとスの戦い』の訳文について比較検討が行われているが⁽²⁰⁾、そのうちの幾つかは今に至るもナシ語の原文が明らかになっていない。初期の漢語訳は、内容を改変しているものがあると思われる。従って、本稿ではナシ語の原文が明らかになっているもののみを考察の対象とする。

（1）「東岩術岩——黑白鬭争的故事」（周慰蒼訳・趙銀棠改写1957）⁽²¹⁾

（2）「黑白之戦」（楊世光1980）⁽²²⁾

（3）「東術争戦記」（李即善訳・楊世光整理1981）

（4）「黑白之戦」（木易搜集整理1981）

また、1920年代から中華人民共和国の成立直前まで、ナシ族の居住地に長期で滞在したジョゼフ・ロックによる大著、*The Na-khi Nāga Cult and Related Ceremonies*には、『ドゥとスの戦い』の英文による抄訳が収められている（Rock1952, pp.729-734）。この書籍は、スを祭る儀礼「スク」の詳細を記述したものであり、儀礼の中で唱えられる多数の經典の解説と翻訳が収められている。

一方、同じくドゥとスの争いを語りながら、ストーリーのやや異なるものとして、「大鵬とスの戦いの物語」と題されるテキストがある⁽²³⁾。これに見られる異なるストーリーの詳細については、第6節で検討する。

5. 『ドゥとスの戦い』の梗概

以下に『ドゥとスの戦い』の梗概を示す。それぞれのテキストにおいては、部分的な欠落や省略、順序の逆転などが見られることもあるが、ここでは最も典型的なものとして、上記の（4）と（5）のテキストの梗概を示しておく。

（1）遠古の状態の描写

天も地もない時、日も月もない時、恒星も惑星もない時、山も谷もない時、

……スとドウの二人の争いもない時、死と弔い、甲冑の禍もない時……。

(2) 神の白い村の出現

最初に、上に声が出現し、下に気が出現し、声と気が白露に変化して、五行が現れた。五行が変化して、白い雲と白い風が現れた。白い雲と白い風が変化して、五色の卵が現れた。白い卵が変化して、⁽²⁴⁾パ神の白い天地、白い日と月、白い恒星と惑星、白い山と谷が現れ、……、沢山のパの息子と娘が現れた。パ神が九つの地を開き、九つの村を建てた。同様に、サ神、ヘ神の村ができた。

(3) スの黒い村の出現

緑の卵が変化して、ガ神の緑の天地が現れた。……、ガ神が九つの地を開き、九つの村を建てた。黄の卵が変化して、スの黄の天地、黄の日と月、黄の恒星と惑星、黄の山と谷が現れ、……、沢山のスの息子と娘が現れた。スが九つの地を開き、九つの村を建てた。同様に、赤の卵からツエ⁽²⁵⁾の村、黒の卵からスの村ができた。

(4) 境界の木の出現

上に声が出現し、下に気が出現し、声と気が白露に変化して、三滴の露に変化して、ドウの白い海が現れた。この海に木が現れ、鬼神の間に育った。……ドウはこの木を欲しがり、スもこの木を欲しがり、争いと禍、死と弔いが現れた。

(5) ムルドゥズ⁽²⁶⁾一家の出現

上に声が出現し、下に気が出現し、光るトルコ石が現れた。光るトルコ石が変化して、白い天地が現れた。白い天地が変化して、良い声と気が出現した。良い声と気が出現して、イグオカ神（善神）が現れた。イグオカ神が変化して、サイワテ神⁽²⁷⁾が現れた。サイワテ神が変化して、ムルドゥズが現れた。……ムルドゥズが涙と金銀を捏ね、海へ投げると、緑に光る水女が生まれ、これをツツジムと名付けた。ムルドゥズとツツジムは一家となり、息子のドゥゾアルが生まれた。

(6) ムルスズ⁽²⁸⁾一家の出現

上に声が出現し、下に気が出現し、黒いトルコ石が現れた。黒いトルコ石が変化して、黒い天地が現れた。黒い天地が変化して、悪い声と気が出現した。悪い声と気が出現して、イグテュナ神（悪神）が現れた。イグテュナ神が変化して、ミマサテ（悪霊の王）が現れた。ミマサテが変化して、ムルスズが現れた。ムルスズが変化して、スの黒い湖が現れ、黒く光る水女が生まれ、クザナムと名付けた。ムルスズとクザナムは一家となり、息子のアセミウァが生まれた。

(7) ドゥゾアルとアセミウアの出会い

ドゥとスの境界がはっきりしていなかった時、ドゥの地の太陽がスの地に射し込み、スの目が焼けた。アセミウアは、ドゥの地に日月を盗みにやってきた。境界線の丘で、ドゥゾアルとアセミウアが出会い、賭け事をした。ドゥゾアルが「勝った」と言った。アセミウアは「スの地の天地、山谷は黒い。スの地にきて白い天地を開き、白い山谷を作ってくれ、金銀宝石をあげるから。」と言った。ドゥゾアルはスの地に行って白い天地、白い山谷を開くことを約束し、家に帰った。母は反対した。父は、もし行くのなら、スの天地が傾き、山に木が生えず、水が流れないようにしなければならないと言った。

(8) スの地に害を与える

ドゥゾアルは、スの地に行き、天地を傾けて開き、山に木が生えず、水が流れないようにして、金銀宝石を盗んできた。白黒の境に銅と鉄の塊を敷き、銅と鉄の刺を挿して帰ってきた。

(9) アセミウアの死

三日後の朝、アセミウアは武器を持ち、黒い犬を引き連れ、ドゥゾアルを追ってきた。白黒の境に来ると、銅と鉄の塊に滑り、銅と鉄の刺に刺さって死んだ。アセミウアの遺体は埋められ、糠をかけ、溝を掘って水を引いて隠した。遺体から昼には煙が上り、夜には火が上り、ムルドゥズの心は落ち着かない。ムルドゥズは、鷹、カラス、狸に溝を整え水を引かせたが、彼らは言うことを聞かないので、追い払った。鷹と狸は、ムルスズの家に入り込み、ムルスズ、クザナムに事の顛末を話した。ミマサテ、クザナム、クトゥタユ（スの頭目の一人）は泣いた。ムルスズは泣いた。

(10) ムルスズの挙兵

ミマサテ、ムルスズ、ナチツォブ（スの頭目の一人）は相談し、一千一万の兵を起こす準備を進めた。木を切り倒し、ヤクを潰して、その角で幾多の武器を作った。……悪夢で危険を察したムルドゥズは山へ隠れ、ドゥゾアルは海へ隠れた。ムルスズは兵を起こし、ドゥの地へ攻め入った。脅されたツツジムは、ムルドゥズとドゥゾアルが隠れた場所を教えてしまう。ムルスズの軍は、山と海を攻めるが彼らを見つけれない。

(11) クザナムの誘惑とドゥゾアルの囚擒

クザナムは一計を案じ、ムルスズの軍を撤退させる。クザナムは美しい衣装に身を包み、ドゥの海で歌いながら髪を梳き、体を洗った。誘い出されたドゥゾアルは、クザナムと関係を持ち、心を許す。クザナムは変化して、銀で開いた天、

金で開いた地、木には銀の花が咲き、石には金の花が咲く幻影を見せ、ドゥゾアルをスの地へ連れて行く。ムルスズの一千万の兵により、ドゥゾアルは捕らえられ、銅と鉄の牢に入れられた。

(12) ドゥゾアルの死

三年三月と三日が経ち、密かに関係が続けたドゥゾアルとクザナムの間には、息子ドゥゾハバと娘スミサチャが生まれた。看守のナイセトゥは、これをミマサテに告げた。ミマサテとムルスズは相談し、一千万の兵を挙げた。クザナムの制止も空しく、ドゥゾアルは惨殺され、骨は勝利神を呼ぶ角笛に、肉は勝利神の供え物にされた。息子ドゥゾハバはドウの地へ行き、娘スミサチャはスの地へ来ることになった。

(13) 死の報せ

ドゥゾアルがいなくなつてのち、ムルドゥズはあらゆる所を探したが、見つからなかった。それから月日が流れ、ドゥゾアルの息子ドゥゾハバが言った「ドゥゾアルは、スに殺された」という報せを、ドウの白い雲と白い風が伝えた。ムルドゥズとツツジムは泣いた。ドウの祭司ユシブゾも泣いた。

(14) ムルドゥズの挙兵

戦神サイワデ、大将ウァツホァム、ムルドゥズと祭司ユシブゾは相談し、一千万の兵を挙げた。幾多の武器を作り、祭司ユシブゾは、パ神、サ神、ガ神、ウ神、オ神、ヘ神に供え物を捧げ、スの土地を破壊すると宣言した。悪夢で危険を察知したムルスズは、ミマサテと相談し、ドウの一千万の軍が来る前に、八十一のスの兵の堡壘を築き、入り口をスの武将に守らせ、白黒の境の全ての坂を、黒龍、黒虎、黒蛇、ツェの霊などに守らせた。東西南北に堡壘を築き、東西南北の悪霊の王に守らせた。……ムルドゥズの一千万の軍はスの地になかなか攻め入ることができない。飛べる者、跳べる者がムルスズの方に加わり、ムルドゥズの軍が蹴散らされ、ドウの建てた村は占領された。

(15) 祭司ユシブゾの儀式

ムルドゥズとサイワデは相談し、祭司ユシブゾは、祭壇を設け、金銀、トルコ石、宝石を供えて、悪霊を払い、敵の魂を招いて殺し、敵の地に捨てる儀式を行った。ムルドゥズ、サイワデ、祭司ユシブゾは相談し、神を招く使者を遣わし、三百六十の戦神ユマ⁽²⁹⁾を招いた。ヤクと羊の肉、酒と飯、脂身の肉と赤身の肉、香とバターをユマに供えた。パ神の兵、サ神の兵、ガ神の兵、ウ神の兵、オ神の兵、ヘ神の兵を挙げ、それに三百六十の戦神ユマの兵が続いた。さらに一千万の兵が続き、スの地に攻め込んだ。

(16) ムルドゥズの勝利

ヤクと羊の肉、酒と飯、脂身の肉と赤身の肉、香とバターをユマに供えると、ユマの心と気は変化して、ヤクの頭の悪霊を殺した。同様に、儀式を行ってユマに供えると、ユマの心と気は変化して、ヤギの頭の悪霊を殺した。……こうして様々な悪霊を殺した。東西南北のスの堡壘を破壊し、それぞれを守っていたスの武將を討った。天地の間の堡壘を破壊し、ミマサテを殺し、クザナムを殺し、クトゥタユを殺し、ナチツォブを殺し、ナイセトゥを殺した。スの一千一万の者を殺した。仇の角で勝利神を呼ぶ角笛とし、仇の心臓で勝利神の供え物とし、仇の血で勝利神の穢れを除いた。ムルドゥの代、耳には良い知らせが聞こえ、水は流れ池に満ち、寿命は長く、日は長くなった。

(17) 跋文⁽³⁰⁾

以上は末年の八月に、寿南村のトンバが書いた伝説だ。合わせて經典四冊に書いた。トンバの寿命が長く、日は長くありますように。

6. もう一つのストーリー

スを祭る儀礼では『ドゥとスの戦い』を含めて多くの經典が唱えられるが、その中に『シャチュとスの戦い』がある⁽³¹⁾。この經典の内容は『ドゥとスの戦い』と関わるものの、そのストーリー、特に結末には大きな違いが見られる。

『シャチュとスの戦い』によれば、元々、スと人間は異母兄弟であったという⁽³²⁾。二人は分家したが、スは人間に天地を拓かせず、村を作らせず、山で薪も採させず、谷で水も汲ませず、高原で放牧もさせず、狩りもさせなかった。スは九つの天地を拓き、九つの村を建て、山の樹木、谷の水、あらゆる土と石を独占した。分家しても分けないことにしていた父の宝物の帽子と、黄金の鉦はスが湖の中に隠してしまった。こうして人間は生きられない状況となった⁽³³⁾。

困った人間は、トンバ・シャラを招き、儀礼を行って供え物をし、事態の解決を依頼する。トンバ・シャラはシャチュ(大鵬)を遣わすと、シャチュはスを捉え、シャラ大山(世界の中心にある大山)まで引きずり出し、そこにある木に縛り付けた。これにより湖は干上がり、谷の水も涸れた。雨は降らず、地に草は生えなくなった。スはトンバ・シャラに命乞いをし、スが人間を攻撃したのではなく、人間が自然を侵したのだと訴えた。人間が泉を汚し、山の動物を狩り、魚を取り、砂金を取った。山を焼き(焼畑をし)、水を堰き止めたからだと訴えた。

トンバ・シャラは調停案を提示する。人間は九つの村を建て、スの一つの村を建てる。人間は九つの天地を拓き、スの一つの天地を拓く。高山の大木、巨石、大きな川はスに与える。人間は丘が足りなければ高山を拓き、田畑が足りなければ山を拓き、家畜が足りなければ野獣を狩ってよい。ただし、蛇や蛙を殺しては

ならない。口の神に石を養わせ、セの神に木を養わせねばならない……。また、トンバシャラの調停で、一千一万の白ヤクと、一千一万の黄馬を捧げ、スの薬とする。一千一万の白ヤクと、一千一万の黄馬を捧げ、スの布団とし、足を包む。羽の生えたもの一千一万で借りを返し、班のあるもの一千一万で借りを返し、蹄のあるもの一千一万で借りを返す。(その他、儀礼の様々な供物が述べられる。) また、宝物の帽子はシャチュに帰し、黄金の鉦はトンバ・シャラに帰すことになった。

以上が『シャチュとスの戦い』のあらすじであるが、『ドゥとスの戦い』ではドゥがユマの力でスに勝利するのに対し、『シャチュとスの戦い』で人間を助ける神はトンバ教の開祖であるトンバ・シャラであり、そこにはトンバ教の権威付けという側面が見られよう。このような権威付けは、同じくナシ族の古代文学の柱とされる『ルバルザ』の最終部分にも見られるものである⁽³⁴⁾。また、経典のタイトルにも示されているように、実際にスと戦うのは人間ではなくシャチュである。シャチュの語源はチベット語であり⁽³⁵⁾、スとシャチュのイメージは、インドのナーガとガルダと重なる。おそらくこれらのモチーフのルーツはチベット経由でナシ族へ入ったものであろう。

また、『シャチュとスの戦い』の結末で特に着目されるのは、人間とスに結ばれる関係を、一種の協定と捉えている点である。あらゆる人間の活動は自然界の基礎に依拠するものであり、人間が何らかの活動を行えば自然を侵害することになる。人間とスの関係は、いわば負債者と債権者の関係であり、人間は生産活動の結果としてスに借りを負う。スの報復は災害、病となって現れるため、人間は定期的・不定期的に儀礼を行い供物を捧げなければならない⁽³⁶⁾。このようなスと人間の間をトンバ・シャラが仲介した協定として説明するのが、『シャチュとスの戦い』のストーリーなのである。

7. おわりに

『ドゥとスの戦い』については、史実には見えない過去を反映したナシ族の英雄史詩としての見方がある⁽³⁷⁾。しかし、『ドゥとスの戦い』と『シャチュとスの戦い』の双方において神霊や儀礼の優位性が語られ、特に後者についてはトンバの力を見せつける部分が物語の核心となっていることを考えると、物語全体にはナシ族固有もしくは外来文化の世界観が表れているものの、その本質はナシ族の英雄史詩というよりは、トンバ教の宗教説話と捉える方が妥当であろう。

かつてナシ族の居住の中心であった麗江旧市街は、1990年代に急速に観光地化が加速し、1997年のユネスコの世界文化遺産リストへの登録はそれに拍車をかけた。現在、麗江の旧市街はテーマパーク化し、漢民族を中心とする外来の流入人口がその商業的な担い手となり、元々住んでいたナシ族のほとんどが郊外へ移住した。これによってナシ族の伝統文化や、民族言語であるナシ語の継承が困難に

なるという危機感が生まれ、1990年代末から、トンバ文化やナシ語など、ナシ族の自民族文化の伝承活動が始まっている。

ナシ族の人々にとって、他の民族にはない独特の伝統文化として最も重要と思われるものはトンバ經典やトンバ文字などの宗教文化であった。トンバ經典はその核心であり、その中に含まれる『ドゥとスの戦い』などの物語も重要視されている。2009年以降、『ドゥとスの戦い』は、『黒白戦争』の漢語名で、麗江市古城区の無形文化遺産として保護されることになり、2013年には雲南省の無形文化遺産リストに登録され、翌2014年には、国家レベルの無形文化遺産リストに登録された。これを受けて、2014年には、麗江市古城区の無形文化遺産センターが、古城區開南街道貴峰社區三元村に『黒白戦争』の伝承訓練基地を開設し、東巴文化研究院元研究員の和力民氏をその責任者とした⁽³⁸⁾。

一方、以上のような『ドゥとスの戦い』の保護・継承の流れの他に、伝統文化の枠組みを越えた動きも見られる。2007年8月、麗江旧市街の木府広場に作られた舞台においては、「納西東巴史詩音楽歌舞劇・魯般魯饒^{ルバルザ}」が上演された。有名芸能人が700万元を投資したとして報道され注目を集めたこのミュージカルは、『ルバルザ』と『ドゥとスの戦い』のストーリーを合わせてその題材としたものである。このミュージカルの制作においては、複数の著名なナシ族学者が「東巴文化顧問」として招かれている。

また、麗江師範高等専科学校(旧・麗江教育学院)の教授で作家でもあるナシ族の蔡曉齡氏は、2004年に『黒白戦争』の長編テレビドラマ脚本を発表している⁽³⁹⁾。蔡曉齡氏は、この他にもナシ族や麗江に関わる多数の文学作品を発表しており、その一部はテレビドラマ化されている。

2018年、雲南人民出版社の「雲南少数民族民間文学絵本典藏」と題する叢書⁽⁴⁰⁾の一冊として、『黒白之戦』(戈阿干ほか2018)が出版されている。この書籍はナシ族として最初の国家レベルの芸術交流プロジェクトで作成された幅1.5mの大型の連環画⁽⁴¹⁾を基にし、さらに国家民族文字出版プロジェクトの資金を得て出版されたものである。この芸術交流プロジェクトは、2015年より麗江市古城區文化館が主導して行われ、国家芸術基金より100万元の資金援助を得て、ナシ族地域以外の多数の芸術家も参加し、10カ月をかけて計65枚の連環画が作成された。2017年には「納西族史詩『黒白戦争』連環画展」として、北京、成都、杭州、上海、昆明など中国各地で展覧会が開かれ、さらに中国国外ではフランスのパリでも展覧会が開かれている。展覧会終了後、65枚の連環画は北京の中国国家図書館に所蔵された。

このように、ナシ族独特の宗教文化であるトンバ經典の一冊として生まれた『ドゥとスの戦い』は、本来はトンバ教の宗教説話であったが、近年、ナシ族の自民族文化意識が高まるにつれ、その保護・継承の動きと共に、ナシ族文化を代表する作品として、ジャンルの垣根を超えた展開を見せている。また、『ドゥと

スの戦い』が人間と自然の神との関係を語るものであることから、そこに現代的な意味も付与されるようになってきた。対外的な発信を意図し、近年では『ドゥとスの戦い』の英訳本も出版されている⁽⁴²⁾。

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金「ナシ学確立を目指した歴史史料の基盤整備と前近代ナシ族社会経済史の研究」(基盤研究C (18K01018)、研究代表者・山田勅之)による研究成果の一部である。

注

- (1) 和鐘華・楊世光主編1992,p.129。「三本の支柱」とは、『ドゥとスの戦い』、ナシ族の創世神話『ツォバトゥ(人類移動の由来)』、情死の由来を語る『ルバルザ(牧人の移動)』の三つである。これらのうち、ナシ族のトンバが語った『ツォバトゥ』の口語版のテキスト(ナシ語とその邦訳)は、黒澤2006及び黒澤 2007に収録した。また、『ルバルザ』の邦訳は黒澤2011に収録した。
- (2) ナシ語の発音は“Dobbaq”、漢語ではこれに当て字をして“東巴”と表記される。日本語ではしばしば「トンバ」と記されるが、ナシ語の正しい発音は「トンバ」である。
- (3) トンバ文字の他に、音節文字である「ゴバ文字」で書かれた経典も存在するが、全体的に見るとその数は少ない。
- (4) 『東巴経書專有名詞選』(和発源・習煜華・王世英・和力民選編1983)には、これら神名や悪霊の名称が収録されている。
- (5) トンバ・シロ(ナシ語の表記で“Dobbaq Sheello”)と発音されることもある。
- (6) Rock1935,pp.69-70.
- (7) Rock1947,pp.191-193.
- (8) これまでのところ、スの語源に関する定説はないが、ナシ族の研究者である楊傑宏は、チベットにおけるナーガ(蛇神)を指す古い語の“se”がそのルーツであろうと述べている(楊傑宏2013)。
- (9) 白庚勝1999,p.90,342.
- (10) ナシ語でDduq.
- (11) ナシ語で“Dduq aiq Svq aiq”。“aiq”は「争う」を意味する。なお、白庚勝氏は、サムテン・ギエンツェン・カルメイ氏が紹介する物語(桑木旦・G・噶爾梅1994、原文はKarmay1975)が、『ドゥとスの戦い』と非常によく似ていることを指摘している(白庚勝2001)。
- (12) ナシ語はdolkeel.
- (13) トンバ経典の初期の研究としてまず筆頭に挙げられるのは、オーストリア生まれで後にアメリカ籍を取得したジョゼフ・ロックによる研究である。元々植物学者であったロックは、1920年代からのナシ族居住地域での長期滞在において、8000冊に上ると言われる経典を収集し、その翻訳や注釈など膨大な研究を残した。また、1930年代以降は、漢族の李霖燦による研究がある。元々杭州の画学生であった李霖燦は、日中戦争の戦火を逃れて雲南に至り、トンバ経典に出会って研究を行った。また、この時期には著名な言語学者の傅懋勳もトンバ経典の翻訳・注釈を残している。
- (14) 李国文1993,pp.129-131など。
- (15) 李国文1993,pp.224-225など。
- (16) 李国文1993,pp.153-154.

- (17) 和志武1987,p.2。
- (18) 和力民2016,pp.347-348。
- (19) 和力民2016,pp.354-355。
- (20) この他、諏訪1988では、漢語訳の梗概が紹介されている (pp.212-213)。
- (21) 一部修訂の上、趙銀棠1984に収録されている。
- (22) 後に楊世光n.d.に収録され、近年では雲南省の少数民族文学作品を収める叢書の一冊として、単行本で出版されている (楊世光2009)。
- (23) 和開祥・李静生1999-2000。
- (24) 神名。以下のサ神、ヘ神、ガ神も同じ。
- (25) 悪霊の名前。
- (26) ナシ語はMee'leel Dduqzsee。人類の祖先。mee'leelは「天地」、zseeは「酋長」の意味。
- (27) 戦神、護法神の父とされる (和芳・李即善・周汝誠1964,p.1)。
- (28) ナシ語はMee'leel Svqzsee。ムルドゥズと対立するスの主。mee'leelは「天地」、zseeは「酋長」の意味。
- (29) ナシ語でYemaq。
- (30) トンバ教典の末尾には、何らかの跋文が付されることが多い。ここでは和士成・和力民1989、和士成・和力民1999-2000の例を示す。
- (31) 和開祥・李静生1999-2000。
- (32) この經典では、スに対するのは神話的始祖ドゥではなく、「人間 (ナシ語でbbeiceeqssee)」と語られている。この点では、物語は過去の神話というより現在の人間に直接関わるものとなっている。
- (33) 物語の冒頭には、人間がスの領分を侵したという言及はない。『ドゥとスの戦い』に比して人間寄りの視点で語られていると言えよう。
- (34) 『ルバルザ』は、情死した男女を弔う儀礼で唱えられるトンバ經典。自殺した女性カメジュミチの遺言を守らなかったズブユレバは、その祟りにより病に陥る。トンバは古いによりその原因を明らかにし、カメジュミチの霊を弔う盛大な儀礼を行い、それによってズブユレバは快癒する (黒澤2011)。
- (35) Rock1952,p.390。
- (36) 鮑江2017,pp.67-68。
- (37) 陳烈1986、陳烈1988、陳烈1996。なお、このような捉え方が形成された社会背景を考察したものに、楊之海2021がある。また、この他にも『ドゥとスの戦い』の解釈には様々な説があり、それらは吉川1993に纏められている。
- (38) また、この他の試みとして、2007年に麗江市委宣伝部と東巴文化研究院によって制作された三枚シリーズのCDがある。『納西“谷気”崇般図——創世紀』、『納西“谷気”董埃術埃——黑白戦争』、『納西“谷気”魯般魯饒——殉情的来歴』は、民謡歌手の李秀香氏が、トンバ經典の内容を「ゴチ (谷気)」と呼ばれる民謡の調子を用いて歌ったものである。本来、トンバによって儀礼で行われる經典の朗誦と、トンバではない一般の人々の歌う民謡とは別のものであるが、このCDの解説には、人々がトンバ教の儀式に参加する機会が減った今、より通俗的かつ現代的な形式で、これらの文化を継承することを期待すると記されている。
- (39) 晁齡2004。ただし、まだテレビドラマ化はされていない。なお、蔡晁齡氏の作品は、近年ではこのように「晁齡」の筆名で出版されたものがある。
- (40) この叢書では、他にナシ族の『ルバルザ (魯般魯饒)』、イ族の『アシマ (阿詩瑪)』が出版されており、いずれも絵画と文字 (中国語、英語、民族文字) を組み合わせた形式で作成されている。民族文字としては、イ族の『アシマ』については雲南イ文字が使用されており、

ナシ族の二冊はいずれもトンバ文字が使用されている。ただし、トンバ文字は、本来宗教的祭司以外の一般のナシ族が読み書きできるものではなく、さらに言語の一部分のみを書き記すというその性質から、これをテキストとして読むことは困難なものとなっている。この二冊に記された民族文字は、この書物のメインである絵画と同様に、芸術的鑑賞に供するという性質のものである。

- (41) 中国における漫画の一形式で、1 ページに 1 枚の絵と短い文章を配した手のひらサイズの出版物。『黒白之戦』も、1982年に中国民間文芸出版社より連環画として出版されている（冬生・何寧1982）。
- (42) 近年ほぼ同時期に、漢英対照の形式で楊世光整理・孫興文ほか翻訳2020と楊世光整理・徐沙麗翻訳2020の二冊が出版されている。これらはいずれも漢語版の楊世光1980に基づいている。

参考文献

[欧文献]

- Karmay, Samten G. 1975. "A General Introduction to the History and Doctrines of Bon". *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, 33.
- Rock, Joseph. F. 1935. "The Story of the Flood in the Literature of the Mo-so (Na-khi) Tribe", *Journal of the West China Border Research Society*, 7, pp.64-82.
- Rock, Joseph. F. 1947. *The Ancient Na-khi Kingdom of Southwest China*, Vol.I and II, Cambridge Massachusetts: Harvard University Press.
- Rock, Joseph. F. 1952. *The Na-khi Naga Cult and Related Ceremonies*, Part I and II, Serie Orientale Roma 4, Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

[中国語文献]

- 白庚勝1991「『黒白之戦』象徵意義辨」『東巴文化論』（郭大烈・楊世光主編）雲南人民出版社。
- 白庚勝1999『東巴神話研究』社会科学文献出版社。
- 白庚勝2001「『黒白戦争』与『葉岸戦争』比較研究」『民間文化』2001年第1期。
- 陳烈1986「『白黒戦争』の歴史真实性與文学価値」『民間文学』1986年第4期。
- 陳烈1988「論納西族英雄史詩《黒白戦争》」『民族文学研究』1988年第6期。
- 陳烈1996「英雄史詩《黒白戦争》の美学価値」『民間文学研究』1996年第2期。
- 冬生・何寧1982『黒白之戦（納西族神話故事）』中国民間文芸出版社。
- 戈阿干ほか2018『黒白之戦』（雲南少数民族民間文学絵本典藏）雲南人民出版社。
- 和発源・習煜華・王世英・和力民選編1983『東巴經書專有名詞選』中国社会科学院世界宗教研究所・雲南省社会科学院東巴文化研究室・麗江東巴文芸研究室、1983年7月。
- 和正才講述・李即善翻訳1963『懂述戦争（巻上）』麗江県文化館印、1963年11月10日。
- 和芳講述・李即善・周汝誠訳1964『懂述戦争（巻下）』麗江県文化館印、1964年7月20日。
- 和力民2016『田野里的東巴教文化』民族出版社。
- 和土成解説、和力民翻訳1989「董術戦争」『納西東巴古籍訳注（三）』雲南省少数民族古籍整理出版規劃辦公室編、雲南省少数民族古籍訳注第26輯、雲南民族出版社。
- 和土成訳読・和力民翻訳1999-2000「禳垛鬼儀式・董術戦争」『納西東巴古籍訳注全集 第25巻』雲南人民出版社。
- 和雲彩読経、和明信翻訳1984『替身道場 董神与術神戦争之経』中国社会科学院世界宗教研究所・雲南省社会科学院東巴文化研究室・麗江東巴文芸研究室。

- 和志武1987『DDUQ'AIQ SVQ'AIQ《納西東巴經之三》白黑爭戰』雲南民族出版社。
- 和志武編訳1983『納西東巴經選訳』雲南省社会科学院東巴文化研究室。
- 和志武1994『東巴經典選訳』雲南人民出版社。
- 和雲章釈読・和品正翻訳1999-2000「退送是非災禍・董争述闢」『納西東巴古籍訳注全集 第36巻』雲南人民出版社。
- 和開祥釈読・李英翻訳1999-2000「除穢・董術争戦」『納西東巴古籍訳注全集 第41巻』雲南人民出版社。
- 和開祥釈読・李静生翻訳1999-2000「祭署・神鵬与署争闘的故事」『納西東巴古籍訳注全集 第6巻』雲南人民出版社。
- 和鐘華・楊世光主編1992『納西族文学史』四川民族出版社。
- 李国文著1993『人神之媒——東巴祭司面面觀』雲南人民出版社。
- 李即善訳・楊世光整理1981「東術争戦記」『納西族民間故事選』上海文芸出版社。
- 木易搜集整理1981「黑白之戦」『民間文学』1981年第5期。(講述人一和正才・和光)
- 桑木旦・G・噶爾梅、向紅茹翻訳1994「概述苯教的歷史及教義」『国外藏学研究訳文集』第11輯、西藏人民出版社。
- 楊傑宏2013「藏族宗教文化对納西族東巴文学的影響——以東巴文学中神靈動物為例」『百色学院学报』第26卷第4期。
- 楊世光1980「黑白之戦」『玉龍山』1980年第1期。
- 楊世光n.d.『楊世光長詩集 史詩与情歌』雲南民族出版社。
- 楊世光整理・孫興文ほか翻訳2020『黑白之戦』(雲南少数民族經典作品英訳文庫) 雲南人民出版社。
- 楊世光整理・徐沙麗翻訳2020『黑白之戦』(納西族三大史詩英訳叢書) 武漢大学出版社。
- 楊世光2009『黑白之戦』(雲南民族民間文学典藏・納西族) 雲南出版集团公司・雲南人民出版社。
- 楊之海2021「民間叙事傳統再生産研究——基於納西族《黑白戦争》的討論」『原生態民族文化学刊』第13卷第1期。
- 曉齡2004『黑白戦争』(20集大型神話電視連續劇) 遠方出版社。
- 趙銀棠1984『玉龍旧話新編』雲南人民出版社。
- 周慰蒼訳・趙銀棠改写1957「東岩術岩——黑白闘争的故事」『辺疆文芸』1957年第4期。
- [日本語文献]
- 黒澤直道2006『ツォゼルグの物語——トンバが語る雲南ナシ族の洪水神話』雄山閣。
- 黒澤直道2007『ナシ(納西)族宗教經典音声言語の研究——口頭伝承としての「トンバ(東巴)經典』』雄山閣。
- 黒澤直道2011『ナシ族の古典文学—「ルバルザ」・情死のトンバ經典—』雄山閣。
- 諏訪哲郎1988『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性—神話と言語から見た納西族の原像』(学習院大学研究叢書16) 学習院大学。
- 白庚勝1989「黒色と白色の象徴性——中国雲南省ナシ族の史詩『東岩術岩』をめぐって」『日本学報』(大阪大学文学部日本学研究室) 第8号。
- 鮑江著・曹咏梅訳・黒澤直道編2017「俄亜ナシ族の宇宙観とトンバ教儀式「開路」」『古事記学』第3号、國學院大學研究開発推進機構古事記学センター。
- 吉川文子1993「納西文化の色彩における重層性」『比較民俗研究』第7号。

